

特別養護老人ホームにおける成人看護学・ 内科系看護実習Ⅰの試み

—その2 学生の意識の変化—

片山 信子 仙田 洋子

表1-1 「老人とは」どんな人を言いますか

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) 自分で老を感じている人をいう	6	12	19	34.5
2) 高齢期であって経済的、身体的、精神的に独立を失った人をいう	15	30	24	43.6
3) 一定の年齢以上の人すべてを言う	27	54	9	16.4
4) 孫ができたときからを言う。	0	0	2	3.6
5) 老眼鏡をかけはじめた時からを言う	0	0	0	0
6) 無回答	2	4	1	1.8
	50	100	55	99.9

I はじめに

われわれは、すでに特別養護老人ホームで行なった看護実習の概要を報告したが⁴⁾、今回はその実習による学生の変化についてのべたい。

まず手はじめとして、「この実習によって学生の老人観はどのように変化するのだろうか」、「老人問題に対する関心はどの程度啓発されるであろうか」、など学生の意識の変化を中心にして、実習の直前と直後にアンケート調査を行なった。その結果から、この実習が「より適切な老人看護をするための基礎学習となり得たか。」について検討し考察を加えたので報告する。

諸氏のご意見、ご批判をいただければ幸いと存じます。

表1-2 老人に対するイメージはどのようなものがありますか(複数回答可)

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) 暗い	13	7.5	10	5.3
2) 明かるい	2	1.6	2	1.1
3) ほがらか	2	1.6	2	1.1
4) きみしい	38	22.2	29	15.3
5) 世話ずき	13	7.5	17	8.9
6) 無精	3	1.7	5	2.6
7) 几帳面	4	2.3	5	2.6
8) 重厚	3	1.7	3	1.6
9) 軽薄	1	0.6	0	0
10) 頑固	1	0.6	21	11.1
11) 柔軟	0	0	0	0
12) くどい	38	22.2	26	13.7
13) 淡白	1	0.6	0	0
14) 忘れっぽい	31	17.3	30	15.8
15) 足手まとい	6	3.5	5	2.6
16) 多弁	6	3.5	10	5.3
17) 無口	1	0.6	5	2.6
18) つめたい	0	0	0	0
19) あたたかい	8	4.6	13	6.8
20) うれしい	0	0	1	0.5
21) 悲しい	2	1.6	6	3.6
	173	101.2	190	100.5

II 調査の対象と方法

〈調査対象〉

本学看護科2年次生50名、(53年度入学生)

〈調査方法〉

第1回:昭和55年1月23日(実習の1週間前)に本学実習室で当実習のオリエンテーションを行なう直前に、アンケート用紙を一齐に配布し、1時間後に回収した。回収率100%(表1~表3参照)

第2回:昭和55年2月20日(実習の1週間後)に本学講義室で行なった。アンケート用紙を一齐に配布し、1時間後に回収した。回収率94%(表1~表5参照)

III 調査結果と考察

第1回調査と第2回調査の結果を比較しながら、その変化をみた。

〈老人観の変化について〉

1. 老人とはどんな人を言いますか。

1) 自分で老いを感じている人をいう。2) 高齢期であって経済的、身体的、精神的に独立を失なった人をいう。の回答が増加し、3) 一定の年齢以上の人す

べてを言う。の回答が減少している。

表4の⑩, ⑮にもみられるように学生の老人のとらえ方が、歴年令での格一的なものから具体的なとらえ方へと変化したものと考えられる。

実習直前に比べて、実習直後の総回答数が増えたのも、学生の老人に対するイメージが、より具体化したものであろう。(表4の⑧, ⑫, ⑬, ⑰, ⑱, ⑳)。

老人に対するイメージのつよかったものは、12)くどい、4)さみしい、14)忘れっぽい。などであるが、実習後はわずかに減っている。しかし、10)頑固のイメージは実習後に増加している。

2. あなたの両親の老後はどうしたいと思いますか

表2-1 あなたの両親の老後はどうしたいと思いますか

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) 自分が同居して面倒をみたい	16	31.4	23	45.1
2) 兄弟のうち誰かが面倒をみて欲しい	22	43.1	14	27.5
3) できるだけ自分達で生活して欲しい	10	19.6	11	21.6
4) 子供をあてにしないでほしい	1	1.9	2	3.9
5) 考えたこともない	1	1.9	1	1.9
6) 無回答	1	1.9	0	0
	51	99.8	51	100

1) 自分が同居して面倒をみたい。が増えて 2) 兄弟のうち誰かが面倒をみてほしい。が減った。

親の老後について自分を除く兄弟のうちの誰かに任せたいという気楽な回答をしていたものが、自分が主体的に親の老後をみたい。という積極的な変化となったといえよう。具体的な意見としては、表4の③, ④, ⑥, ⑦, ⑯, ⑳がある。

3. あなたの老後は子供と同居したいと思いますか

表2-2 あなたの老後は子供と同居したいと思いますか

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) ぜひ同居したい	1	2.0	1	2.1
2) できれば同居したい	18	36.0	19	40.4
3) どちらでもよい	24	48.0	20	42.6
4) 同居したくない	5	10.0	7	14.9
5) 絶対に同居したくない	2	4.0	0	0
6) 無回答	0	0	0	0
	50	100	47	100

この問いに対しては、ほとんど変化がみられない。このことは「自分の老後」は遠い将来でありすぎため、具体的な予測が立たないのであろうか。しかし自分もいずれ老人になるということに気が付き始めたようである。(表4の⑥, ⑦)。

4. あなたは結婚したら実父母と同居したいと思いますか

表2-3 あなたは結婚したら実父母と同居したいと思いますか

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) 同居したい	4	8.0	5	10.2
2) 同居してもよい	13	26.0	25	51.0
3) どちらともいえない	16	32.0	9	18.4
4) できれば同居したくない	15	30.0	6	12.2
5) 絶対に同居したくない	2	4.0	4	8.2
6) 無回答	0	0	0	0
	50	100.0	49	100.0

結婚後に実父母と同居することについては、1) 同居したい。2) 同居してもよい。といずれも同居を肯定する回答が実習後に増えた。しかし一方では、5) 絶対に同居したくない。と答えた人も増え、わずかであるが否定的態度の明確になった人もいる。3), 4) の中庸的ともいえる回答が減少した。

この実習によって「老親と同居してもよい」などの老人に接近しようとする姿勢が芽生えたと考えられる。3), 4) が減ったのは、今まで老人を見ることもなく、同居について考えたことさえなかった学生が、この実習で老人に接したことによって老人への対応の一端を掴んだものと考えられる。

5. あなたは結婚したら配偶者の両親と同居することをどう思いますか

表2-4 あなたは結婚したら配偶者の両親と同居することをどう思いますか

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) 同居したい	3	6.0	5	10.4
2) 同居してもよい	21	42.0	25	50.0
3) どちらともいえない	4	8.0	6	12.0
4) できれば同居したくない	20	40.0	11	22.0
5) 絶対に同居したくない	2	4.0	1	2.0
6) 無回答	0	0	0	0
	50	100.0	48	100.0

配偶者の両親との同居については、1)同居したい。2)同居してもよい。と肯定する者がわずかながら増加した。そして、4)できれば同居したくない。5)絶対に同居したくない。などの同居を否定する者は減少している。

実習前の学生の意識の傾向は、本学で数年前に調査された⁵⁾学生の意識の傾向と大差ないものであった。

配偶者の両親との同居について否定的傾向を示していた者が肯定的な回答へと移動している。

6. これからの老人はどこに生活の場をもつのがよいと思われませんか。

表2-5 これからの老人はどこに生活の場をもつのがよいと思われませんか

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) 子供と同居	13	25.5	14	28.6
2) 子供の近くに別居	34	66.7	29	59.2
3) 別居	1	2.0	1	2.0
4) 老人ホーム	0	0	0	0
5) わからない	3	5.9	4	8.2
6) 無回答	0	0	1	2.0
	51	100.1	49	100.0

この調査項目では、ほとんど変化がない。社会的状況、子供の経済的能力、転勤の問題などと共に特別養護老人ホームの実態、老人福祉にかかわる複雑な諸問題を知ったのち、「今後の老人の生活の場はどこがよいのか」と問われても簡単には回答ができず、困惑しているものとも受け取れる。自分達はどう考えたらよいのかかわからないのが本音であろう。しかし表4の③、④、⑬、⑳、などに見られるように家族との結びつきを大切にしたいと考えるようになっていく。

7. 今の老人は若い人に何を期待していると思いませんか。

1) 永年の功労を認めて尊敬してほしい。11) 孫のしつけ・育児等に対する意見をとり入れてほしい。の回答が僅かに増加しているが、ほとんど実習による変化はみられない。

もっともこの実習は健康な老人と接したものでないから、この設問は適当でなかったかも知れない。今後は学生が広く老人を理解するためにも、常時介護を要する特別養護老人ホームの老人だけでなく、いろいろの健康レベルの老人にも接することが必要であろう。

しかし、この実習を通して、実際に接した老人から、

表3-1 今の老人は若い人に何を期待していると思いませんか(複数回答可)

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) 永年の功労を認めて尊敬してほしい	9	4.4	13	6.5
2) あわれみをもって世話をやいてほしい	3	1.5	3	1.5
3) 老人という差別をしないで同等に扱ってほしい	21	10.3	16	8.0
4) やさしくしてほしい	26	12.8	26	12.9
5) 仕事をとりあげてしまわないでほしい	28	13.7	23	11.4
6) 働らせるだけ社会に役立てるよう役割を与えてほしい	18	8.9	21	10.4
7) 最低生活が保障できるだけの経済的援助をしてほしい	13	6.4	13	6.5
8) 保護してほしい	5	2.5	5	2.5
9) 仲間に入れて年寄りの意見もきいてほしい	32	15.8	29	14.4
10) 経済的権限をもたせてほしい	2	1.0	0	0
11) 孫のしつけ、育児等に対する意見をとり入れてほしい	4	2.0	12	6.0
12) 家事から開放してほしい	0	0	0	0
13) きままにさせてほしい	8	4.0	9	4.5
14) こずかいなどを充分つかわせてほしい	0	0	2	1.0
15) 近所づきあい、親戚づきあい、社会的活動などにも積極的に参加させてほしい	12	5.9	10	5.0
16) 老人からもっと学んでほしい	17	8.4	14	7.0
17) 年よりをあてにしないで経済的、社会的にも早く独立してほしい	4	1.4	5	2.5
18) 責任をもたせないでほしい	0	0	0	0
19) そのようなことは考えたことはない	1	0.5	0	0
20) 私には関係ないことである	0	0	0	0
	203	99.5	201	100.1

学生らは多くのことを学びとったことが表4の⑧、⑭、⑯、⑱、⑳、などから伺われる。老人の生き方や考え方の尊厳さ、重厚さなどを何気ない日常の言動の中から、よく学びとっている。これらは、直接に老人と接することなくしては得られない貴重な実習体験といえよう。

8. 老人に対して親しみを持てますか。

1) 一般的に老人は好きである。という回答が倍増し、3) どちらともいえないという中庸的な回答が減少した。

このことは、身近かに老人を知らないで曖昧な態度

表3-2 老人に対して親しみを持てますか

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) 一般的に老人は好きである	9	18.0	19	39.6
2) 肉親, 親戚の老人は好きである	3	6.0	3	6.3
3) どちらともいえない	33	66.0	22	45.8
4) 一般的に老人は好きでない	5	10.0	3	6.3
5) 老人は嫌いである	0	0	1	2.1
6) 無回答	0	0	0	0
	50	100.0	48	100.1

であった者が、老人に接してみてもはじめて老人に親しみを持つようになったと考えられる。積極的に老人に注目し接近した結果の変化であり、実習の成果を物語っているといえよう。更にこのことは表4の②, ⑤, ⑨, ⑩, ⑳などからも十分に伺われる。

9. 老人とのつきあいについて

表3-3 老人とのつきあいについて、あなたはどうか

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) 気軽に話ができる	13	26.0	24	48.0
2) 努力して話をする	26	52.0	15	30.0
3) 話しにくい	7	14.0	4	8.0
4) 話をしたくない	1	2.0	1	2.0
5) 老人を意識せずに話す	3	6.0	5	10.0
6) 無回答	0	0	1	2.0
	50	100.0	50	100.0

1) 気軽に話ができる。は倍増し、5)老人を意識せずに話す。も僅かながら増えた。一方では2)努力して話をする。3) 話しにくい。が減少したが、4) 話をしたくない。1名は依然として変わっていない。

老人を意識しないで気軽に話ができる人が増えたことは、実習で積極的に老人に話しかけ得たこと、それを自分の努力で実践した結果の変化であろう。これは表4の②, ⑤, ⑯, ⑳, などからも伺える。

10. あなたと老人問題との関係について

1) マスコミで取り上げる老人問題は関心をもってよく見る。が増加し、3) あまり関心がないが時々みる。が減少した。

従来、なに気なく過し、特に関心を示さなかったと思われる、3) あまり興味がないが時々みる。が、1) に移り、積極的に関心を示すように変化したものであ

表3-4 あなたと老人問題との関係について

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) マスコミの取り上げる老人問題は関心をもってよくみる	2	3.9	8	17.0
2) 老人問題は関心はあるが時々しかみない	25	49.0	22	46.8
3) あまり興味がないが時々みる	21	41.2	15	31.9
4) 関心がないのでみない	0	0	1	2.1
5) 考えたくない	1	2.0	0	0
6) 無回答	2	3.9	1	2.1
	51	100.0	47	99.9

ろう。僅かながら実習の効果と考えたい。表4の③, ⑳, ㉑などにみられるように少しずつ関心がでてきているように思われる。

11. 困っている老人に出合ったときあなたはどうしますか

表3-5 困っている老人に出合ったとき、あなたはどうしますか

選 択 肢	実習直前		実習直後	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1) できることは全部してあげる	1	2.0	0	0
2) 私にできることはなるべくやってあげたい	23	45.1	14	28.0
3) 老人が自分でできることはなるべく自分でするように必要なことのみ手をかす	25	49.0	34	68.0
4) 甘やかすといけないのでどうすかを手を出さないうでみている	0	0	1	2.0
5) なるべくかかわらないようにする	2	3.9	0	0
6) 無回答	0	0	1	2.0
	51	100.0	50	100.0

2) 私にできることはなるべくやってあげたい。が半減した。そして3) 老人が自分で出来ることはなるべく自分でするように必要なことのみ手をかす。が増加した。5) なるべく関わらないようにするは皆無になった。

単に哀れみや同情で「してあげる」のでなく、「自立への援助をする」ことこそ必要であるという看護の基本を体験的に理解した人が2) から3)へ移行したと考えられる。人間として相手を認め、尊重する姿勢が育ったことが伺われ、これらは表4の④, ⑬, ⑱, ⑲などにもみられる。また表4の㉑, ㉒, では残存機能を低下させないことへの配慮、すなわち自立へ

表4 あなたはこの実習の前と後で老人に対する考え方にどのような変化がありましたか（自由記述）

A 実習効果があったと思われるもの

- ① いわゆるボケている老人には初めて接し戸惑った。老人というものはこういうものだと、ひと言で言えるようなものではなく、その1人・1人を認めてゆくことが必要であると思うようになった。
- ② 老人とあまり接したことがなかった為、本当は老人が嫌いでした。でも老人と実際に話してみても以前のような気持はなくなり、少しでも喜んでもらえるようなら話を続けていきたい。側にいたいと思うようになった。
- ③ 町で老人を見ると「ああ老人ホームの人もせめてこの位元気なら」とか、その老人の家族のこととかを前よりも強く感じる。やはり老人は家庭で家族と暮らすのが一番だと思う。
- ④ 老人と同居したことがなく不安であったが、今後は割り々と気軽に話ができると思う。老人というもっとボケているのかと思ったが、1人の人間としてきちんと自分の考えを持って生きている人もいて驚いた。自分のこれまでの経験を話してくれる時は「老人」とは思えないほど輝いていた。けれど老人は家族と共に暮らすのが一番だと思う。
- ⑤ 老人に対して親近感ができ、気軽に老人と話すようになったと思う。老人の心理・特徴がつかめ、今まで理解に苦しんでいたことが理解できるようになった。
- ⑥ 必ず私も老人になる。
- ⑦ 年を取ることは誰でも避けることができない。誰でもいずれは老人になるのである。しかし老人にもいろいろな老人がいる。私は人にかわいがられるような老人になりたいと思う。良い年の取り方をしたいと思う。
- ⑧ 年を取るのと嫌味で頑固で物に対して偏見のある見方しかできなくなるものだと思っていたが、実習に出て、話をしてみると、なかにはそういう人もいるけれど、ほとんどの老人が本当に経験・知識の宝庫だということがわかった。年の功からか、何でも良く知っておられ、何も知らない自分に色々助言して下さい。老人ホームに行く前までは偉そうに「老人の悩み・話・愚痴」を聞いてあげようなどと思っていたのだが、実際に体験してみて、確かに体力的な面では介助が必要であるが、精神的にはまだまだ若い方が多く、むしろ好い加減に毎日を送っている私達より、余程充実した日々を送っていらっしゃる方が多いように思えた。
- ⑨ 実習が終って少し老人が好きになった。
- ⑩ 親しみが持てるようになった。
- ⑪ 実習前まではある一定の年齢に達した人すべてを老人であると思っていたが、この老人ホームの実習で、自分で自分のことをすることのできない人達をみて、そういう人を老人だと思えるようになった。
- ⑫ 老人にはある一定のパターンがあると思っていたけれど、接してみると人それぞれちがっていた。老人ホームに入っている人は明るい老人は少ないと思っていたけれど、以外と明るい人も多かった。
- ⑬ 様々な老人がいた。自分を諦めている人もいれば、自分をしっかり見つめて生活している人や、ただ何を考えているか寝てばかりいる人など想像以上に1人1人違っていた。
- ⑭ 平素何もしないでのおんべんだらりと生活しているように見えたが、実際はそうではなく何か自分の中に確固たるものを持っていて他人を気にしないし自分を信じきっているように思えた。老人から教えられるものがこの実習でも多分にある。
- ⑮ 実習前には老人の区別を年令的なものだけで考えていたが、実習を通して多くの老人達と接して、自分のことを自分でやることのできる人は、未だ老人と言えないような気がした。
- ⑯ 大分変わったようです。世の中には色々な人が居るということ。自分の周りの老人が家族といるだけでも幸福なのだと行うこと。常に老人は目上の人であり、どんな人でも自分よりは色々なことを知っているのだから敬意を表わさなければならない。どんな人でも受け入れられると思える。老人と親和関係を持つのも思っていた程困難ではないと思う。これからはどんな人にもすーと入って行けるような気がする。
- ⑰ 小さい頃から老人の身近にいて、老人を良く知っていて、老人に対する理解もあった。特に老人観の変化はないがそのような施設にいる老人の心理に初めて触れ、家にいる老人と施設にいる老人では同じ老人でも違うことをあらためて知った。又老人も各人さまざまで、自分が今迄持ってきた老人感をそのままその人に当てはめてはいけなかった。
- ⑱ 老人というのは寂しくて、ただ死を待っているような暗い人達ばかりと思っていたが、若者に負けない位若々しく気持ちの明るい人も沢山いるんだということが分かった。また色々な老人がいて老人というものを一つの枠の中だけで考えてはいけない。人に頼らず自分でできることは自分でやる人が多い。
- ⑲ 特別養護老人ホームにいる老人と言えば病人といった感覚で、何かこちら側がしてあげるといった感じを持っていた。しかし実習を終えてみると、老人は本当に人生の先輩だと思ふ私達若い者が習って耳を傾けることが必要なことも大いにあると感じた。又自分ができるからしてあげるといった感覚は、こちらの一方的な驕った考え方であるように思った。話をしに行くと、本当に喜んでくれ、又気の若いおじいちゃん、おばあちゃんがいるのを見て、あるいは接してこちらの方が楽しくなった。このホームにいて世話になってすまないと言う気持ちを強くもっているのを感じて、老いたとしても人間のプライドを持っておられると思った。
- ⑳ 実習前は老人と接したことが少なかつただけに話すことがあるのかなど、自分を随分離れた視点でみつめていたが、実習後ではお年寄りが身近かに感じられ、その人1人1人が長い人生を送ってきて若い頃や苦しい頃も乗り越えていらっしやっただけだと人生の奥深さを感じた。又とても心優しく親切である上皆んな淋しんだと思った。そして自分の祖父や親について考え直され、もっとだいいじらしいと可哀想だと思った。
- ㉑ 老人におけるリハビリテーションの重要性ということ、いっそう強く感じるようになった。
- ㉒ 老人には健康体操やリハビリテーションが大切であると思った。

B 実態をとらえたと思われるもの

- ㉔ 老人ホームという点、それも特に「特別養護」とつくと、とても特別な場所のように感じていたが、生活としての場であり特別のイメージが強いのが良くないと思った。
- ㉕ 変化は特別なない。ただ色々な老人の方々と接することができて良かったと思う。今迄は家族の中の老人しか知らなかったのだ。
- ㉖ 老人と長時間接するのはこれが初めてであった。自分なりに色々なことを学ぶことができたと思うと同時に、このようにしてまで生き長らえることが幸福なのかと思うことも度々だったし、人間関係の醜さも目のあたりにした。もう若くない自分の親に置き換えてもよく考えたが、絶対親を他人の手に任せはしまいと強く思った。やはり老人は家族と共に暮すのが一番である。どんなに条件が悪くても他人に迷惑をかける位なら自分の子供に迷惑をかけようと親に考えてもらいたいと思う。変に遠慮してもらいより我がままな老人で構わないと思う。自分の親なのだから。
- ㉗ 老人と言っても人間にかわりないし、成人と同様甘えのない人は自分でしっかりやっているし、また老人という特別の嵩をもっている人もいる。結局老人も人間なのだという考え方は変りない。
- ㉘ 実習前は老人の綺麗な面だけを見ていたように思う。しかし実習後は老人の生きることへのしっこいような姿勢を見せ付けられたように思う。
- ㉙ 老人は頑固で自分の中に閉じ籠もり考えを変えないものだと思っていたが、淋しくて話し相手を求めているということが強く思えた。
- ㉚ 現在祖母と同居しているのだが自分の祖母だけが話が長く、くどいのだと思っていたのは間違いだと分かった。老人は誰でも話が長い。話し相手を求めているようである。またひと口に老人と言っても色々な人がいるようである。
- ㉛ 老人はあくまでもどんな痴呆化しても、植物人間になっても、尊敬すべきである。まだ「老人とは何か」自分の中で確立できていない。初めて老人と接した衝撃の方が大きい。段々と変化すると思う。

C 分類のむつかしいもの

- ㉜ 別に老人についての価値感・概念が変わったということはない。老人についての考え方の変化も意識されない。ただ特別養護老人ホーム施設に対して開眼された。
- ㉝ 余り変りない。たいして変りないように思う。(4)
- ㉞ 別に変化はないように思うが、特別好きで仕方がなくなったわけでもない。前から老人に対して特別な目を持っていなかったが、今は老人に対して目を向ける姿勢ができたように思われる。
- ㉟ 老人の我がままは仕方ないと思った。
- ㊱ やはり老人に対する私の考え方としては「同情」という言葉が離れない。身体的にも不自由になり、精神的にも孤独に陥り易いということで可哀想に思えてくる。そこで私達が言葉を投げかけることで「あたたかさ」を少しでも与えようと思っている。
- ㊲ あまり変らない。元気な老人の姿も見てみたい。
- ㊳ 老人とひと言でいっても誰一人同じ人はいないということで、老人を別にジャンル分け的な考えで見ないでおくということを感じた。老人も若い人も人間に変りないのだから、老人と言うことで特別な目はいらぬのではないか。
- ㊴ 子供と同じでとてもかわいいと思った。

(註) 表4・表5をまとめるに当り以下のようにした。

- (1) 表現された内容を歪めたり、変えたりすることのないように、なるべく学生の記述に忠実に記載した。
- (2) 内容に近似性や関連があると思われるものを近くに置き換えた。
- (3) 集団にまとめることや文章の要約は避けた。

表5-1 この実習で比較的多く満足したものに、どんなものがあるか。

A 実習内容に関するもの

1. 沢山の老人に出会い、色々な問題について考えたりするようになった。
2. 自分なりの「老人観」を持てた。
3. 老人と親しくなり、人生の先輩から話が聞けたこと。
4. 老人と話が良くてできた。(2)
5. 老人と接するのに抵抗がなくなったこと。
6. 多くの老人と接することができて教えられた面があったと思う。
7. 老人とのコミュニケーションが持てたこと。
8. 日頃接する機会の少ない老人と接することができ老人観が得られたこと。
9. 「生きる」ことについて考えさせられたこと。
10. 色々な老人と接したこと
11. 老人と接することが多かった。
12. 老人と接する機会がもてた。
13. 老人と親しくなれた。
14. 老人との会話。
15. 老人と接して会話することができたこと。
16. 多勢の老人と話ができたこと。
17. 多くの老人との会話、満足というよりも楽しかった。
18. 多くの老人と仲良くなれた。良く話げできた。
19. 気軽に老人と話せるようになったこと。
20. お年寄りと気軽に話ができて、理解できたこと。
21. お年寄りと少しの時間であるが話ができた。
22. 私のやった介助(食事、清拭、入浴など)でお年寄りが満足してくれた。
23. 自分のおじいさん、おばあさんが増えたような感じ。
24. 機能訓練をしながら対話が多くできたこと。その老人が昨日よりも多く訓練ができたということで感謝してくれたこと。
25. 自分が誰かの役に立てるということ。
26. いつも一人でいる老人の話し相手となって、喜んでもらったこと。
27. 老人を世話してちょっとしたことにも感謝されたこと。
28. 他人である実習生にも心配ごとを打ち明けてくれたこと。
29. 自分から進んで何かしてあげた時など。老人と自然に話げできたとき。
30. 老人との対話の中で、本当に思っていることをそのまま打ってつけた時。
31. 人に対する視野が広がった。特に不安に思っていた対話スムーズに運ぶようになった事に満足している。
32. 老人と初めて間近に接せた。知識が広まった。
33. 色々な人と接して、ある程度人間関係ができた時。自分が行なった介護が感謝された時。
34. 老人ホームにおける老人の実態を知り、老人ホームの職員の業務について知った。
35. 老人の心理、特徴がつかめた。老人ホームの現状が分かった。
36. 特別養護老人ホームにおける老人の生活など知ることができた。
37. おしめ交換、食事の介助など実際の看護を見学でき、又実習できたこと。
38. リハビリテーションの指導ができた。
39. リハビリテーションを知ることができた。
40. 基礎実習で得られなかった生活介護ができたこと。
41. 老人の日常生活の介護をすることによって、看護上の基本的技術が実践できた。

B 実習形態に関するもの

42. 業務別に寮母の仕事を一通りできたこと。
43. 寮母さんが同時代の人達だった為か、何でも聞くことができたし、色々親切に教えて下さった。
44. スタッフの方々が協力的で、色々いちらから説明して下さり良かった。
45. リハビリが盛んに行われていた。
46. 老人ホームの雰囲気明るく家庭的であったこと。寮母さんが優しいこと。
47. わりと明るい園で、雰囲気思ったより良かった。
48. 老人の実態を知ることができた。
49. 老人ホームにおける実際の様子が少しでも見られたこと。
50. 老人ホームで働いている寮母さんの姿にとっても感動した。
51. 職員の老人に対する生の姿を見ることができたこと。
52. 実習生がきたことで老人に喜んでもらえたこと。
53. 日頃あまり付き合のない世代、または今まで馴染みのない施設の人々に接する機会を与えられたこと。
54. 寮母さんと親しく話げできた。

表5-2 この実習で不満や苦痛の多かったものにどのようなものがあるか。

A 実習内容に関するもの

苦痛だったもの	<ol style="list-style-type: none"> 1. はじめはおしめ交換の時の臭が苦痛だったが数日のうちに慣れた。 2. おしめ交換時において、話が聞きとりにくい。伝えにくい。 3. おしめ交換で老人のお尻を拭いた時は正直言って苦痛だった。 4. おしめ交換の際、全部の老人が大便をしていたこと。 5. おしめ交換の時に積極的に取りくめなかった。 6. おしめ交換は慣れていないので苦痛だった。 7. おしめ交換の時、手袋をしないでやったのは苦痛だった。 8. 臭気（特におしめ交換の時）。 9. おしめ交換時、便が出ているのを拭き取るのが苦痛であった。 10. おしめ交換とか、入浴介助。特に中年の男性の介助に抵抗があった。 11. 寝たきり老人の食事の介助がむずかしかったこと。 12. 老人の話がききとれない。 13. 臭いがひどかった。 14. 臭いには少し閉口した。 15. 臭い。 16. 部屋や廊下に臭気が充満していた。
不満だったもの	<ol style="list-style-type: none"> 1. 面接記録をとるという課題が与えられていたので、絶えずそのことばかり考えていたように思う。 2. 実習期間が5日間しかなかったのに、業務割当と並行した為、担当老人と接する時間が思うように持てずイライラした面があった。 3. 日課が詰まっていた、お年寄の方々と思っていた程話ができなかった。 4. 実習目標が多く、短い期間でケース・レポートや面接記録を書かなければならないので負担になった。 5. 学習目的があまりにも漠然としていて、何をどうすればよいのか手間取った。 6. 業務割当の学習内容に制限があった。 7. 実習内容が決められていたこと。 8. 老人ホームの実習の目的がつかめず辛かった。 9. 話しかけても少しも取り合ってくれない老人がいて、どういう風に接したら良いかわからない。 10. 老人の意見を職員にうまく伝えられなかったこと。 11. 寮母さんとのコミュニケーションがなかった。 12. 寮母さん達は（排泄の世話を）手袋でやられているのは不公平だと思うし、素手の介助者と組んで、その人が衣服とか、お尻を拭く仕事をすれば良いと思う。（おしめ交換のやり方について）。 13. 反省会の時、「汚なそうにおしめに触っていた」と言われたのが辛かった。私達は手袋をしていなかった。

B 実習形態に関するもの

	<ol style="list-style-type: none"> 1. 担当部屋が4つあって、どの部屋にも均等に行きたいが、それが困難だったこと。 2. 実習期間が短かすぎる。1つの部屋の人数が多いので全体の人に目が届かなかった。 3. 受持部屋によって実習内容に差がありすぎた。 4. 昼間だけの実習であったこと。 5. 反省会に現場の職員の方が参加してくれているのに学内でできる反省会のようにした。 6. 現場での反省会やミーティングの時は、スタッフとの意見交換などに有効に使いたかった。 7. 寮母さんから、あまり指導をして貰えなかった。 8. 受持老人についての資料が欲しい。そうすればもっと短時間に有効なコミュニケーションが持てたと思う。 9. 通勤費が毎日500円必要だったこと。
--	---

C その他

	<ol style="list-style-type: none"> 1. 入浴の時の性的問題とか、特浴の際の人間扱いではないように思えて苦痛だった。 2. 混浴、男女別にしてほしい。 3. 老人を1人の人間として扱ってないような点があった。（例）特浴の時に棒ずりでお尻を洗う。おしめ交換の時のゴム手袋をしたままで布団を直す。布団を平気で床の上に置く。 4. 食事の介助の際、おかずを手で潰していたこと。それを粥の中に入れていたのを見て抵抗を感じた。 5. 指導員の態度・話すこと、実行することが伴っていない。 6. 寮母さんの間や職員の間の人間関係に対立が感じられて嫌だった。 7. 介護業務の中で、学生の意見を取り入れようとしなかったこと。 8. 学生側に取り組む姿勢・やる気がなかったように思えて、恥かしく思い苦痛だった。
--	--

の援助の大切さを体験的に学んだと考える。

＜実習の受けとめ方について＞

実習に対する満足・不満足について自由記載により問うた結果(表5-1, 表5-2)のような記述をみた。

これらを内容によって次のように分類してみた。

1) 満足したもの

① 老人に出会い、接し、親しくなり、関係が持てたことに満足している。(29人)

② 「生きる」ことについてなど、人に対する視野が広がり、老人をとりまくいろいろな問題を考える機会となったことに満足した。(6人)

③ 自分の行動で、老人が喜んで下さったことに満足した。(6人)

④ 特別養護老人ホームの実情を知った。(3人)

⑤ リハビリテーションへの介助、生活援助などの看護技術の実践ができたことに満足した。(4人)

2) 苦痛であったもの

① おしめ交換(臭い、大便の始末、異性に対するもの)の際に苦痛を感じた人。(49人)なかでも臭気のはどさと大便を素手で扱うことへの抵抗が強かったとしている。

3) 不満であったもの

① 実習が、5日間という短期間にかぎられていたのに、業務別の実習割当と居室担当の実習割当とを、併行したことに対して不満をもつ者。(4人)

これらは、積極的に実習に取り組んだにもかかわらず、自主的に実習内容を計画する余地が無かったことや、ケース・レポート、面接記録などといった課題が、盛り沢山であったことに対する不満であろう。

② 実習の目的が十分に理解できなかったもの。(3人)

ばく然とした目的は持っていたが、実際に自分の具体的行動に結びつけられなかったものであろう。

今後は実習への導入方法やその内容にも工夫と検討を重ねていきたいと思う。

IV ま と め

我々は、この特別養護老人ホーム実習により次のような学生の老人観の変化をみた。

1) 老人のとらえ方が、歴年令で格的だったものから、より具体的・個別的なとらえ方へと変化した。

2) 親の老後について、兄弟の誰かに任せなかったものから、自分が主体的に受け止めようとする姿勢に変わった。

3) 家族との結びつきを大切にしたいと考えるようになった。

4) 老人の生き方や、考え方の尊厳さ、重厚さなどを何気ない日常の言動の中から感じとっている。

5) 老人がすきになった。

6) 老人を意識しないで、気軽に話ができるようになった。

7) 老人問題に関心をもつきっかけになった。

8) 困っている老人に出合ったとき、単に哀れみや同情で「してあげる」のではなく、「自立への援助をすることが大切である」という看護の基本を体験的に学んだ。すなわち、「人間として相手を尊重する」。「残存機能を低下させない」。ことへの配慮がみられるようになった。

このように特別養護老人ホームでの実習体験は、看護学生に貴重な体験をさせることが明らかになったといえよう。

宮崎ら¹⁾は「老人問題に関する意識を規定しているものとしては、知識や経験よりも関心が重要である」と述べているが、今回の調査により、われわれは意図的な教育計画の中で老人に直接かかわらせる体験から、老人問題への関心を高めることができる、という結論を得た。

現行の看護教育課程の中で試行錯誤しながら定着させたこの実習は、初期の目標をほぼ達成できたと考えている。鎌田ら²⁾も「このような看護を看護学生が体験することは、学生の看護観や老人観、ひいては人生観を培う基礎体験になるであろう」と言っているが、われわれも同じ結論に至った。

特別養護老人ホーム実習によって、老人を身近に感じ、老人問題への関心を高め、老人観を育てた看護学生は、このあと病院での実習に臨むことになる。

病院においても例外でなく、老人の外来、病棟利用は増加の一途をたどっている。それらの老人を看護の対象とした時に、この学生たちは、彼等の生活に着目し、その人に適した看護の判断・行動が出来るような素地を培ったものといえよう。

さらに展望するならば、この体験学習は、単に看護実習にとどまらず、老人に出合う機会のすべて、すなわち、病院の内外を問わず老人の看護に携わる限り役立つ、基本的な素地と考える。また社会を構成する一員として、若者としての責任を自覚する人間として成長するにも役立つであろう。

鎌田は、³⁾「老人看護は、看護そのものの具現化」といい、³⁾「老人看護が人間志向、生活適応を理念と

したものであること。老人看護には看護の主体性が強く求められること、チーム活動が強調されることなど、老人看護は看護理念を具体的に理解し、実践に体现するプロセスであることを意味しており、基礎看護教育に老人看護プログラムを組み込むことは、看護を学習するうえで意味深いことであると考えます。老人は看護を学ぶうえでまたとない教育対象であるともいえる。」とのべているが、われわれも深く同意する。

看護教育の教科課程においても看護の概念が拡大さ

れてからすでに久しい。

病弱老人は、病院内は勿論のこと、寝たきり老人として家庭にも、特別養護老人ホームにも増加の一途をたどり、看護の手がさしのべられることを待っている。

卒業後、病院や施設・家庭などのあらゆる場面で看護しようとしたとき、適切な対応ができるような資質を育てるためにも、看護の基礎教育課程の中に、このような実習を計画することが必要であり有効と考える。

引用文献・参考文献

- 1) 宮崎昭夫他, 老人問題に関する意識構造の研究(Ⅱ), 岡山県立短期大学研究紀要, 第20号, 113 P, (1976)
- 2) 鎌田ケイ子他, 老人看護シリーズⅠ, 老人看護総論, 第1巻, 141 P, 日本看護協会出版会
- 3) 鎌田ケイ子, 老人看護と看護教育, 看護5月号, 76 P, (1979)
- 4) 仙田洋子他, 特別養護老人ホームにおける成人看護学・内科系看護実習Ⅰの試み, -その1-実習の概要, 岡山県立短期大学研究紀要第25号, (1981)
- 5) 久留島京子他, 老人問題に関する意識構造の研究(Ⅰ), 岡山県立短期大学研究紀要第20号, (1976)
- 6) 鎌田ケイ子, 看護婦と老年観, 看護, 12月号, 12~17 P, (1980)

昭和56年3月31日受理